

HIROTTA KOINU
GA KERUBEROSU DESHITA

# 拾った子犬がケルベロスでした

～実は古代魔法の使い手だった少年、本気出すとコワい(?)愛犬と楽しく暮らします～

vol.5

Arai Ryoma
荒井竜馬

# 主な登場人物

MAIN CHARACTER



**カイル**

王国の副宰相で、ガリアの不正を疑っている。

**サラ**

剣のみで戦う『純剣士』の女性。魔法は使えないが卓越した剣技を誇る。

**エリ**

冒険者ギルドの受付職員。ソータと顔見知りで親切にしてくれる。

**ガリア**

王国の宰相で、自称・古代魔法の研究者。

**オリバ**

元「黒龍の牙」のリーダー。ソータとの勝負に負け、現在は服役中だが……

**ケル**

地獄の番犬ケルベロス。見た目は可愛い子犬だがなかなか武闘派。時折その残虐性が垣間見えることも……

**ソータ**

失われた『古代魔法』の使い手の少年。現代魔法よりも高度な理論で、魔法を自在に操る。

# 1　膨れ上がる憎悪

時は遥か昔、地獄の存在が確立される数千年以上前に遡る。

神話の世界では、阿修羅族とデーヴァ族による戦いが行われていた。二種族が繰り広げていたのは、世界の秩序を守る王の座をかけた争いである。

戦争の舞台となった須弥山の山腹には、阿修羅族とデーヴァ族の死体が転がって山になっていた。その死体の山の中に、阿修羅族の王である阿修羅王はいた。

阿修羅王は頭が三つあり、腕は六本生えており、数多くの武器を操るため、戦闘能力が突出していた。しかし、そんな阿修羅王でさえも、デーヴァ族に追い詰められていた。

デーヴァ族の王、帝釈天は手足の数は人と変わらないが、法具の力を用いることで、阿修羅王並みの戦闘能力があったからだ。

阿修羅王は帝釈天をギロッと睨む。

「ぐっ！　なぜ貴様などに俺が負けねばならんのだ！　貴様などっ……」

阿修羅王は体に力を込めるが、身動きすら取ることができずにいた。

帝釈天が呆れたようにため息を漏らすのを見て、阿修羅王は声を荒らげる。
「なんだその目は！　俺を馬鹿にしているのか！」
帝釈天が何も言い返さずにいると、阿修羅王は大声で続けた。
「貴様よりも、俺の方が人間たちを正しく従えることができる！　俺が王にふさわしいに決まっているだろ！」
帝釈天は小さく息を吐いてから、目の色を変えずに口を開く。
「御前は人間に寄り添ったつもりかもしれんが、その行動が人間界と天部の境を危うくしている。世界を崩壊させかねない危険な行動だ」
「っ！」
「それがこのざまだ」
帝釈天が親指で後方を指さすと、空間の一部がひび割れていた。
「御前が勝てば世界が崩壊する。私はそれを止めねばならん」
「ぐっ！」
阿修羅王は強く歯ぎしりをして俯く。
それから、なんとか動いた指で力強く拳を握った。
「人間たちの声を無視しろというのか！」
「無視をしろとは言っていない。干渉のしすぎだと言っているんだ」



帝釈天はじっと阿修羅王を見ながら続ける。
「どうやら、御前は神としての振る舞いがなっていないようだ」
「貴様っ！　貴様なぞに愚弄される謂れはないぞ！」
帝釈天は阿修羅王をその場に残し、去ろうと歩き出す。
「話し合いにならんようだな。そんなに人間と仲良くしたいのなら、勝手にするがよい」
「待て！　俺はまだ負けてないぞ！」
阿修羅王は睨み殺すような鋭い眼光を帝釈天に向けるが、彼は振り返ることはなかった。
「この俺を無視だと……俺の存在までも否定するつもりかっ」
阿修羅王の心には、憎悪の念が宿り始めた。
敗北を理解しようとはせず、ただ帝釈天を強く恨む気持ちだけが残ったのだ。
帝釈天はその念を感じながら、背を向けたままボソッと小さく呟く。
「……御前のような奴が必要な人間もいるだろう」
しかし、憎悪の念に駆られた阿修羅王に、その声が届くことはなかった。
こうして、戦いは阿修羅族の敗北で終結した。
この戦争の終結後、阿修羅王は再び須弥山のふもとに下ろされることになる。
のちに、阿修羅王は人間の嫉妬や妬みを理解できる人間に近しい存在であること、力強い闘争心などを買われ、仏法を守る八部衆の一員となった。

しかし、八部衆になっても、数千年の間積もりに積もった憎悪の念が消えることはなかった。
そして、数千年後――
その膨れ上がった憎悪の念は、人間道に影響を及ぼし始める。
妬み恨みなどの感情が強く、愚かな考えを持つ人間たちの心に対して。

◆

時は現代に移り、王都のとある高級な酒場を貸し切って、騒ぐ集団がいた。
その中心にいる小太りの白髪頭の男は、夜職の女性たちを侍らせて酒をぐっと一気に呷った。
そんな白髪頭の男の飲みっぷりを前に、女性たちがわっと声を上げる。
「さすがガリア様！　惚れ惚れとする飲みっぷりですわ」
「あら？　ガリア様。お酒が空になってしまいましたわ。私、まだガリア様と一緒にいたいです」
ガリアという男の右隣に座る女性、ルーナが色っぽくそう言うと、ガリアは、にやりといやらしく笑う。
「ははっ、それなら新しい酒を開けてやる！　金はいくらでもある。一番高い酒を持ってこい」
ルーナはガリアの言葉を聞き、すぐにカウンターへ新しい酒を要求した。
ルーナはガリアのグラスに新しい酒を注ぎながら、満面の笑みをガリアに向ける。



「さすがガリア様、お金の使い方が豪快ですね！」
すると、すぐにガリアの左隣に座る女性、アンナがガリアの腕に抱きついた。
「ガリア様は宰相兼研究者ですものね！　エリート中のエリート！　本当に惚れ惚れしちゃいますぅ」
ガリアは鼻の下を伸ばしながら、得意気に笑う。
「当たり前だ。俺ほどの肩書を持ってる人はそうはいないだろうな！　ガハハハッ！」
ガリアは酒の入ったグラスを揺らしてから、くいっと酒を喉に流し込んだ。
アンナの言う通り、ガリアは国の宰相をしながら研究者としても名を馳せている。
あくまで、肩書だけはエリートそのもの。
しかし、実際はそうではなかった。
ガリアは自分では宰相らしい働きをせず、私腹を肥やすためだけに国のお金を使い込んでいた。
それだけでは飽き足りず、古代魔法の研究者という肩書きで多額の研究費用を横領し、私欲を満たすためにお金をつぎ込んでいた。
研究者が極端に少ない古代魔法という分野において、権力で周りを黙らせ、適当な研究結果を成果として認めさせることは容易かった。
すると、ふと思い出したようにルーナが口を開いた。
「そういえば、最近古代魔法を使って王都を救った凄い子がいるらしいですね」

ガリアはルーナの言葉を聞いて、眉をぴくっと動かす。アンナはそんなガリアに気づかず、上機嫌で身を乗り出した。
「あの子でしょ！　冒険者から騎士になった子！　かなりの有望株なんじゃない？」
二人の会話に出てきたのは、ソータの話題だった。
ガリアはアンナたちがソータの話で盛り上がる中、激しい貧乏揺すりを始めた。
ドンッ！
そして、二人がさらに盛り上がろうとしたところで、ガリアは酒が入っているコップを力強くテーブルに叩きつけた。その衝撃でコップの酒がこぼれ、床に酒をぶちまけた。
アンナたちは恐る恐るガリアの顔色を窺う。
「ガ、ガリア様？」
「ガリア様、どうされたのですか？」
ガリアは貧乏揺すりを激しくして、苛立った様子で口を開く。
「古代魔法を使う？　現代の魔法使いが使えるはずがないだろ」
「え、でもその子、勲章も貰ったって……」
「ちっ！　上手く国も騙したとしか思えんな。しばらく国を離れた隙に、好き勝手やってくれたみたいだ。そのソータという冒険者、将来はとんだ極悪人にでもなるんじゃないか？」
ガリアはそう言い、ぐいっとコップに残っていた酒を一気に呷った。



ルーナは少し考えた後、ハッとして顔を上げる。
「騙した？　もしかして、勲章を貰った子が古代魔法を使った話は嘘なんですか？」
「当たり前だろ。とんだペテン師だ、そのガキは」
ガリアはわざとらしいため息を吐いてから、ぐっとソファの背もたれに寄りかかる。
すると、アンナが小さく首を傾げた。
「え、そうなんですか？　あれ嘘だったんだ。でも、なんでそんなことを……」
「いるんだよ。研究者の少なさを逆手にとって、適当なことを言って金稼ぎしようとする輩がな」
「そんな人がいるのですか？　とても許せませんね」
ガリアはルーナの言葉に大げさに肩をすくめる。ガリア自身がその輩なのだが、ガリアは自分のことを棚に上げていた。
ソータたちが国内で活躍している間、ガリアは周辺諸国に外遊していた。もちろん公務などほとんどしておらず、ただ長期旅行をしていただけだった。
ガリアは国に帰ってきて初めて、ソータという冒険者が騎士職になり、勲章も貰ったという話を聞いた。そして、ソータが古代魔法を使うということも。
しかし、ガリアはソータの力を認めようとはしなかった。
現代の魔法使いが古代魔法を使えるはずがない。そんな固定観念と知識のなさから、ソータは自分と同じように、古代魔法の名前を使って一儲けしようとしている輩だと考えたのだ。

自分以外の人間が自分と同じことをして儲けようとしている。それが気に入らなかった。
ガリアは含みのある笑みを浮かべ、自身の白い顎髭を優しく撫でた。
「それじゃあ、そろそろペテン師を潰してやるとするか」
そう言ってから、右手の指をパチンと鳴らした。
すると、すぐに秘書の男がガリアの後ろにやってきた。
「エリック。そのペテン師集団に学会の招待状を渡してこい」
「承知いたしました。ガリア様」
ガリアはニヤニヤと悪だくみの笑みを浮かべる。
それからアンナたちに視線を向けて言う。
「お前たちも見に来い。面白いモノが見られるぞ」
「面白いモノですか？」
アンナはガリアの言葉に首を傾げる。
「ああ、嘘塗れの英雄が社会的に殺されるところだ」
こうして、ガリアはソータたちの実力を勘違いしたまま、彼らを潰そうと動き出すのだった。

◆

獄卒の鬼、阿傍羅刹たちを倒し、勲章を貰った一週間後。俺――ソータたちは王都内を馬車で移動していた。その道中、正面に座る、女剣士のサラさんが俺を見て口元を緩める。
「ご機嫌だね、ソータ」
「はい！　まさか学会に招待されるなんて思いもしませんでした」
サラさんに笑みを返し、馬車の窓から見える景色に目を移した。
勲章の授与式を終えた俺たちは、王都を少し観光してから地元に帰ることになった。
そんなある日、王都観光を終えて宿に戻ると、宰相の遣いの者が学会の招待状を届けにやってきていた。
遣いの人曰く、宰相は宰相としての仕事の傍ら、古代魔法の研究もしているらしい。そして、俺の噂を聞いた宰相が、ぜひ自分の発表を聴きに来て欲しいと言っているとのことだった。
「学会が行われるのは王都図書館があるところだよね」
俺はサラさんの言葉に頷き、貰った招待状に目を落とす。
王都図書館は国が建てた図書館で、学術的な論文なども多く収蔵されている。
そして、その近くには研究発表をする大きな会場がある。そこで今回の魔法学の研究発表が行われるらしい。
一体、宰相がどんな古代魔法を発表するのか今から楽しみだ。
俺がそんなことを考えていると、ケルベロスのケルがうきうきとした様子で俺を見上げた。

「ふむ。新たな知識を取り入れて、さらなる力を手にしようということだな。そして、さらなる成り上がりを目指す！　フフフッ、さすがソータだ！」
小さな黒犬の姿のケルは、ヘッヘッという息遣いをして、前足を俺の脚に乗せてきた。
サラさんはケルの言葉を聞いて、「ほぅっ」と声を漏らした。
「今以上の成り上がりか……うん。もっと私も頑張らないとだね」
サラさんはそう言って、真面目な顔で頷いた。
俺は二人が本気の表情をしていたので、慌てて手を横に大きく振った。
「違いますって。成り上がりのためじゃないですよ！」
「え、違うのかい？」
サラさんは意外そうな顔で小さく首を傾げた。
俺はこれまでのことを思い出す。
俺たちはそれぞれ別の冒険者パーティを追い出されてから、一緒にパーティを組んで色んな依頼をこなしてきた。
時に魔物たちと戦い、時に地獄や六道（ろくどう）と呼ばれる別の世界からの敵とも戦い、いくつかの街を守ってきた。
その功績が評価され、今や騎士職になって勲章まで貰っている。
現時点で、冒険者パーティを追放されたときからは想像もできないほどの成り上がりだ。いつかは今以上の成り上がりを目指すのもいい。
でも、この前騎士になったばかりだし、そんなハイペースでぽんぽん成り上がっていこうなんて思っていない。
すると、ケルがしばらく考えてから不思議そうに口を開く。
「それでは、なぜさらなる力を求めるのだ？」
「力を求めるんじゃないって。単純に古代魔法に対する好奇心だよ」
俺はケルの頭を撫でて口角を上げる。
サラさんはそんな俺たちを見て笑う。
「そうだね。ソータは暇（ひま）さえあれば古代魔法の魔導書を読んでるし、その考えが先に来るべきだったね」
俺はサラさんの言葉に頷いてから、近くに置いてある魔導書に目を向ける。
今俺が持っている古代魔法の魔導書は合計二冊。
一つは家の物置にあったもので、もう一つは初めてサラさんとダンジョンを攻略したときに手に入れたものだ。
あれ以降、いくつかの街を訪れているのだが、古代魔法の魔導書の情報を得られることはなかった。もっと知識が欲しくても、ずっと魔導書を得られなかっただけに、今回の発表は心待ちにしていた。すると、ケルが期待に満ちた顔で俺を見つめていた。

「フフフッ、そうは言ってもまた愚か者が絡んでくるかもしれんぞ。そいつを成敗すれば、またソータたちは成り上がることになる」
「さすがに今回はそんなことはないってば」
俺はケルの言葉に笑いつつも、上手く受け流すことができないでいた。
ケルが嬉しそうにしているときは、大抵ケルの大好きな愚か者が絡んでくるからだ。
ケルがご機嫌に尻尾を振る姿を見て、俺はなんとも言えない気持ちになるのだった。
さすがに今回は何もないよね？
そんな少しの不安を抱きつつ、俺たちは馬車に揺られて学会の会場へ向かった。

馬車移動を始めて数十分後、目的地に到着した。
馬車を降りた先では、門から全体を把握することが難しいほど広大な敷地内に、立派な街並みが築かれていた。
歴史を感じさせる石造りの建物がいくつもあり、構内には図書館の利用者なのか、学会への参加者なのか、多くの人が行き交う。俺たちはそんな景色を前に、一瞬言葉を失ってしまった。
すると、サラさんが図書館の外観を見ながら小さく呟いた。
「……これは凄いね」
「そうですね。ここまで大きいとは思いませんでした」



王都図書館は大量の収蔵数を誇り、貴重な本が多く保管されていることから、近くに研究施設や学校などが建てられていったらしい。
それにしても、ここまで大きな図書館だとは思わなかった。俺がそんなことを考えていると、数歩前にいるケルが嬉しそうに辺りをキョロキョロと見回していた。
「ケル？　何を探してるの？」
「これだけ人がいるのなら、愚か者の一人や二人いるはずだ。ちょうど良いのがいればいいのだが……」
ケルはこちらも振り返らずに、そんなことを口にした。
俺は小さくため息をついてから、ケルをひょいっと持ち上げる。
「そんなの探さなくていいよ。それより早く会場に向かわないとね」
ケルは俺に抱き上げられて、足を空中でひょこひょこと動かす。
……どうやら、愚か者を探したい気持ちが抑えられないらしい。
「ソータ。地図によると会場は一番端の建物みたいだよ」
サラさんは招待状に同封されていた地図を片手に、西の方角を指さした。
地図に描かれた通りに移動すると、他の建物よりもひときわ大きい会場に着いた。
大人数がその会場の入り口に集まっており、学会の規模の大きさが見て分かった。
俺はそんな光景に圧倒され、言葉に詰まる。

「こ、こんな凄いところでやるんですね」
「これ、みんな学会を聴講しに来た人なのかな？」
俺はサラさんの言葉に頷いて、辺りを見やる。
「そうなんじゃないですかね。というか……俺たちかなり浮いてませんか？」
周りにいるのは、頭の良さそうな学生や研究者たちばかり。
他に帯刀し、魔物と戦う格好をしている人たちはいない。
そのせいか、さっきから、ちらちらと視線を感じる。
まぁ、普段は冒険者が訪れるような場所ではないのだろう。
せっかく招待してもらったのは嬉しいけど、長居しづらいかも。
俺は少しの気まずさを覚えながら、会場へと向かった。

建物に入ると、人混みが少しだけ緩和され、人々は中にあるいくつかの研究発表会場に向かっていた。
各会場の入り口を見てみると、『現代魔法学』や『実用魔法』など、それぞれ詳細なテーマが書かれた紙が貼られていた。どうやら魔法学学会といっても、いくつかジャンルがあるらしい。
さて、古代魔法の学会が開かれる会場はどこだろう？
俺がそう考えていると、サラさんが俺の肩を叩いた。

「ソータ。あそこにカウンターがあるよ。聞いた方が早いんじゃないかな？」
サラさんが指さす方には、制服を着た女性職員が二人座っていた。
ケルがカウンターに近づいていくと、その職員たちは頬を緩ませた。
「「きゃあ、可愛い！」」
二人はワッと一通り盛り上がってから、俺とサラさんにも視線を向けた。
サラさんは軽く挨拶をしてから話す。
「お尋ねしたいことがあるんですが、いいですか？」
「えっと、どうされましたか？」
カウンターの職員たちは俺たちの格好を確認して、不思議そうに首を傾げた。
どうやら、俺たちが学会に参加しに来た人だとは思っていないみたいだ。
まぁ、こんな格好してちゃ仕方ないか。
俺はそう考えてから、学会の招待状をカウンターに置いた。
「これを貰ったんですけど、古代魔法の分野の研究発表の会場ってどこですか？」
すると、職員たちは招待状をじっと見て確認してから、勢いよく顔を上げた。
「これ、ガリア様からの招待状ですか!?」
「しかも特別席の招待状！　す、すぐにご案内いたします！」
先ほどまでゆったりしていた職員たちの態度が、急に畏(かしこ)まった。

やっぱり、宰相からの招待って凄いことなんだ。
すると、一人の職員が招待状を見て首を傾げた。
「お名前は、ソータ様。ん？　ソータ様？」
職員は隣に座る職員と目配せをしてから、控えめに口を開く。
「ソータ様って……あの、最年少で冒険者から騎士になったっていうあのソータ様ですか？」
「ソ、ソータ様？」
俺は思いもしなかった言葉に目をぱちぱちとさせる。
俺は頭を軽く掻いてから、躊躇いがちに頷く。
「えっと、多分そのソータで合ってますけど」
俺が答えると、職員の二人がワッと声を上げた。
「あの、古代魔法を使える大魔法使いの英雄!?」
「じゃあ、隣にいるのは英雄の剣士様!?」
職員たちは羨望の眼差しを向け、そんな言葉を口にした。
「大魔法使い？　英雄？」
「剣士様？　それって、私たちのことかい？」
俺とサラさんは職員たちの言葉にたじろぐ。
すると、職員たちの声を聞いた周囲が一気にざわついた。

「最年少とは聞いていたが、あんなに幼いのか」
「あの子が古代魔法を？　あんなに難しい古代魔法をどうやって……」
「王都以外にもいくつも街を救ってるらしいぞ。勲章だけで足りるのか？」
周囲にいた人たちは、口々にそう言った。
俺は照れくさくなり、頬を掻いてサラさんを見る。
「なんか様付けだったり、英雄呼びされたり、凄いことになってます？」
「どうやら私たちが思っている以上に、私たちの活躍が知られているみたいだね」
すると、ケルが誇らしげに胸を張って俺たちを見上げた。
「さすが、ソータとサラだ。大衆からの支持も得るようになってきたのだな」
「いや、支持って……そんな大層なことじゃない気がするけど」
さっきまでは場違い感があって居づらかったけど、今度は別の意味で長居しづらくなってしまった。俺たちが困っていると、それに気づいた職員たちが深く頭を下げてきた。
「し、失礼いたしました！　騒ぎになっちゃいましたね！」
「すぐにご案内いたします！　どうぞこちらへ！」
職員たちはそう言って、俺たちを先導して歩き出した。
俺たちは憧れの眼差しを向けられながら、職員たちの後に続く。
しかし、少し進むと、突然人の流れがピタッと止まった。

周囲にいる人たちは皆頭を下げ、誰かの出待ちをしているようだった。
先導をしていた職員たちも同様に頭を下げたので、俺たちも訳が分からないままそれに倣うことにする。俺は頭を下げながら職員に視線を向けた。
「あのこれ、なんですか？」
「宰相のガリア様がお見えになります。ガリア様が会場に入る際は、皆こうしないとなんです」
すると、少しして男たちの声が聞こえてきた。
視線を少し上げてみると、そこには上流階級が着るプールポワンを身につけた、白髪頭で小太りの男性が現れた。
職員の話と服装から察するに、あれがこの国の宰相のガリアなのだろう。
ガリアはお付きの人とニヤニヤしながら会話をしている。その様子は、とても好印象とは言えないものだった。
「ほほぅ」
すると、ケルが声を漏らした。なぜか尻尾を嬉しそうに振っている。
あれ、ケルが喜んでいるってことはまさか……
ガリアはちらっと俺たちの方を見て、何か悪だくみをするように笑みを浮かべた。
そして、ガリアたちはそのまま会場の奥へと向かっていった。
今の笑みは一体……



ガリアの姿が完全に見えなくなると、さっきまで畏まっていた人たちが一気に脱力した。ため息を漏らしたり、ひそひそと小声で会話したりしている。
詳しいことは不明だが、一目でガリアが嫌われているということは分かった。
サラさんが周囲を見回して眉尻を下げた。
「あの方が宰相か。あまり慕われてはなさそうだね」
「そうみたいですね。なんか嫌々頭を下げさせられてるって感じでしたし」
一体、何をしたらこんなに嫌われるのだろう。
そして、気になることがもう一つ。
俺は先ほどから嬉しそうに尻尾をフリフリと振っているケルを見る。
「えっと、ケル。何かいいことでもあった？」
ケルはニパッとした笑みで振り向いた。
「ふむ。なかなか良さそうな愚か者を見つけてな」
「その愚か者って。まさか……」
「あのガリアとかいう者だ。きっと、我を楽しませてくれるに違いない！」
すると、ケルはガリアがいた方向を見て、目をキラキラとさせていた。
俺は嫌な予感がしたので、慌てて首を横に振る。
「いやいや、ただ学会に呼んでくれただけだよ。何も起こらないって」

「そこが気になるのだ。なぜあのような者がわざわざソータたちを招待したのだろうな」
「それは……」
初めは、同じく古代魔法を極めようとする者として繋がりを感じて呼んでくれたのだろうと思っていた。
でも、周囲のガリアに対する反応や扱いを見ていると、なんとなくそんな綺麗な理由ではない気がしてきた。
それに、去り際に俺たちに見せたあの笑顔。
とても意味深に見えたこともあり、不安を煽られてしまった。
すると、ケルが俺の脚に自身の前足をかけて立ち、上機嫌に俺を見上げた。
「向こうから仕掛けてきているのだ。策に乗った上で返り討ちにしてやろうではないか。なぁ、ソータよ！」
ケルはヘッヘッヘッという息遣いと共に、そんなことを口にした。
ケルがこういうことを言って、何もなかった試しがないんだよね。
俺は不安を抱きつつ、何も起こらないことを願った。
それから学会の会場に入り、十数分後には会が始まった。
俺たちがいる場所は特別席らしく、関係者が招待される席だった。ほとんどが貴族や有名な学者なのか、高そうな服装や聡明そうな顔つきをしている人たちばかりだった。



会場の入り口よりも、こっちの方がもっと場違い感が凄い。
学会の発表は基本的に現代魔法ばかりだった。どうやら、古代魔法の発表者は宰相のみらしい。
学会は順調に進んでいき、ガリアが壇上に現れると、聴講者がワッとわざとらしく盛り上がった。
その反応に、俺の顔が引きつる。
ガリアは聴講者の声に軽く応えてから、古代魔法研究の発表を始めた。
発表は数十分で終わり、最後には登壇したときと同じような喝采が起きた。
俺はそんな喝采の中、複雑な表情でガリアの板書を見ていた。
すると、サラさんが不思議そうに口を開く。
「どうしたんだい、ソータ？」
「なんというか、色々めちゃくちゃな発表な気がします」
古代魔法の魔導書は二冊しか読んだことがないので、学術的に詳しいことは分からない。
それでも、実際に古代魔法を使っている身からして、パッと聞いただけでもおかしな点が複数あった。
これ、結構間違いだらけの発表なのでは？
俺は眉を寄せて、そんなことを考えた。
すると、ガリアが一通り拍手を浴び終えてから話し始めた。
「私の偉大なる発表はいかがだっただろうか、諸君。ああ……そうだった。普段なら私の完璧な発

表に質問をする者はいないが、今日は特別に質問を許そうではないか」
ガリアはにやりと嫌な笑みを浮かべた。
「最近騎士になったという話題の冒険者、ソータよ。古代魔法を使えるという君の意見を聞かせてもらおうかな？」
「え？」
俺が突然名前を呼ばれて驚くと、聴講者たちがざわついて俺に視線が集まった。
さっき入り口でも感じたけど、王都ということもあってか、それなりに俺たちの噂を知っている人たちがいるらしい。
すると、ガリアは挑発するように、俺たちに対してくいくいっと人差し指を動かす。
「壇上に来てもらおうか、ソータとそのお仲間よ」
その言動から嫌な予感がした。
しかし、そんな俺を気にすることなく、ケルはノリノリで壇上へと駆け出した。
「ソータ、サラよ。行こうではないか、メインイベントが発生したぞ！」
メインイベントって、全くそのつもりはなかったんだけどなぁ。
しかし、先に行ってしまったケルを放置するわけにはいかず、俺とサラさんはケルの後に続いて壇上に上がった。
ガリアは俺よりも先に上がったケルを不思議そうに見たが、すぐに視線を俺に向け直した。



それから、ガリアは得意気な笑みを浮かべる。
「それでは、今日の私の発表について、意見を聞こうじゃないか」
「えっと……」
俺は改めて聞かれ、困り顔で頬を掻いた。
色々と気になる所はあったけど、立場もあるし聞かない方がいいのかな？
俺がしばらく何も言えずにいると、ガリアが噴き出した。それから一歩ずつ距離を詰める。
「何も言えないのか？　んん？　古代魔法を使えるのに、その知識がないと？　んんん？　矛盾（むじゅん）しているんじゃないか、それは」
「い、いえ、矛盾と言いますか、なんと申し上げたらいいのか分からないです」
俺がはぐらかそうとするが、ガリアは俺の顔を覗き込んで続ける。
「もしかして……古代魔法を使えるというのは嘘だったのか？　となると、あの功績も全てでっち上げということかぁ？」
「え？　ち、違いますよ！　なんでそうなるんですか？」
俺は突然の言いがかりに、首を横に振る。
すると、ガリアは俺の肩に手を置き、耳元で囁く。
「悪く思うな小僧。古代魔法で金を稼ぐのは俺一人で十分なんだよ」
「え？」

「残念だが、お前は社会的に終わりだ。自他国のお偉いさんと多くの研究者が見ている前で、ペテン師認定される。騎士職も勲章も剥奪されて笑い者だな、クソガキィ」
ガリアは笑い声を抑えながら、ニヤニヤと笑う。
「な、なんですか急に！」
俺は肩に置かれたガリアの手を払いのける。
すると、ガリアは大げさに肩をすくめた。
「おおっと、野蛮な冒険者だな。宰相の手を払いのけるとは。もしかして、図星を突かれて苛立っているのかぁ？」
「だから、違いますって！」
「悔しいのなら古代魔法の一つでも使ってみるがいい。大衆の面前で、本物の古代魔法を使えればの話だがな」
ガリアは俺ではなく、聴講者たちを煽るようにそう言った。
聴講者たちは先ほどとは違うざわつきをしていた。
すると、ケルが俺の方を振り向いて悪い笑みを浮かべる。
「ソータよ。派手なのを一つ見せてやるがよい」
「そうだね。さすがに誤解は解かないと」
あんまり面倒なことはしたくないけど、降りかかってきた火の粉は払わないと。

しかし、室内ということもあって、いつも使っているような火力が高い古代魔法をぶっ放すわけにもいかない。
逆に威力を抑えすぎても、古代魔法だって思ってもらえない可能性がある。
これ、どんな魔法を使うのがいいのだろうか？
そんなふうに考えたとき、偶然ガリアの研究内容が書かれた黒板が目に入った。
そこには『空間振動魔法の再現』と書かれた一文があった。
確か、ガリアは発表の中で、現代魔法では空間振動魔法を使うのは不可能だと言っていた。空間振動魔法が発展すれば、有事の際にその情報を音として伝えることができる。書面だと手紙が届くまでに時間がかかるが、その時間を大幅に短縮できるらしい。
現代では不可能なこれを再現できれば、俺が古代魔法を使えるんだって信じてくれるはずだ。
多分、魔法を使って空気を振動させて、大きな音だけを出せればいい。俺はガリアの発表の中での矛盾点を整理し、脳内で自分なりの理論を組み立てていった。
学術的な難しいことは分からないけど、古代魔法の実践経験は俺の方が断然上のはず。
「うん……これなら、いけるかも」
「何をぶつぶつと言っている？　もっと大きな声で言ってみるがいい。そうだなぁ、『私は古代魔法なんて使えません。功績も全て捏造したペテン師です』というのはどうかね？」
ガリアは嫌味な笑みを浮かべ、そんなことを言ってきた。

俺はガリアを軽く睨んでから、不敵な笑みを返す。
「証明します。俺が古代魔法を使えるんだってことを……『火球』」
俺は魔法を唱え、『火球』が手のひらの発射口を通る寸前でぴたっと止めた。
発射口を圧縮させ、『火球』の通り道を完全に塞ぐ。
すると、『火球』の発射口周辺の圧力が一気に上がる。そこで『火球』をキャンセルすると同時に、一気に発射口を緩めれば――
ダンッ!!
膨れ上がった圧力が一気に解放され、発射口から大きな音が鳴った。
「ひぃっ！」
そして、俺たちのすぐ正面にいたガリアはその音に驚き、情けなく尻もちをついた。
それから少しして、聴講者からボソッと声が漏れた。
「く、空間振動魔法だ」
すると、その声を聞いて聴講者たちがざわつき出した。
ガリアはハッとして、尻をついたまま俺を睨む。
「き、貴様っ、なんだ今の魔法は！」
あれ？　古代魔法が使えることを証明しろっていうから証明したんだけど……
俺は眉根を寄せて、ガリアが使っていた黒板を指さす。



「えっと、『火球』を圧縮して調整しただけですよ。多分、前提が違ってる気がします。古代魔法なら圧縮率を変えれば、すぐに今の魔法は使えるようになりますよ」
俺がさらっとそう言うと、会場がシンと静まりかえった。
「あ、あれ？」
不安になって聴講者たちの方を見ると、彼らは口々に言う。
「え、じゃあ、宰相の理論は違ってるってこと？　今までの宰相の研究ってなんだったんだ？」
「確か、全て順調だって言ってたぞ。だから、あれだけ出資してもらってたんだろ」
「前提が違うってどういうことだ？　数十年かけているプロジェクトだろ？　まさか、実験自体してない？」
徐々に聴講者たちのざわつきは大きくなっていった。
すると、ケルが一歩前に出て、腰を抜かしているガリアを見下ろす。
「もしかして、全て捏造なのではないか？　フフフッ。どうやら、ペテン師は貴様の方だったらしいな」
「き、貴様だとぉ。なんだ、この失礼な子犬は！」
ガリアはケルの一言を受け、顔を真っ赤にさせて歯ぎしりをした。
聴講者たちは人間の言葉でガリアを追及するケルに驚き、また一段とざわつき始める。
すると、ガリアが声を荒らげる。



「うるさいぞ！　俺がこの国随一の古代魔法の研究者だ！　こんな学も家柄もないようなガキの言うことを信じるな！」
しかし、聴講者たちの声が静まることはなく、ガリアには疑いの目が向けられ続けた。
ガリアは額に青筋を立てて、俺たちを強く睨みつけた。
「そんな侮辱、許さんぞ！　許さぁぁん！　斬首刑にしてくれるわ！」
ガリアは立ち上がり、そう叫ぶと、大股で壇上から下りていった。
俺はガリアの言葉に顔を引きつらせる。
「ざ、斬首刑……」
「む。それならば、その前にあやつを斬首してしまうか」
ケルはそう言って、ガリアを追いかけようとした。
「待って、ケル！　さすがに、それはマズイって！」
俺は慌ててケルを抱きかかえて、遠くなっていくガリアの背中を見つめる。
「ていうか、ガリアはなんでこんなことをしたんだろ？」
ガリアと会ったのは今日が初めてだし、恨まれるようなことをした覚えはない。
俺のことが気に入らないみたいだったけど、接点のないガリアには関係ない気がする。
俺は色々と困惑しながら、ケルとサラさんと共に壇上から下りた。
すると、下りた先には品の良い格好をした男が立っていた。

「少し話を聞かせてもらっていいかい？」
「話、ですか？」
俺が首を傾げると、男は俺に微笑みかける。
「ああ。申し遅れた。私は副宰相をしているカイルというものだ。ガリア様の研究についてもう少し詳しく話を聞かせて欲しい」
「「副宰相!?」」
俺とサラさんは声を揃えて驚いた。
なんで副宰相まで学会にいるんだ？　俺はそんな違和感を抱く。
「えっと、お話をするのはいいんですけど、その前にガリア様をなんとかしないと、俺が斬首刑になってしまうんですが」
「ああ。そのことは気にしないでくれ。おそらく、首を切られるのは君たちじゃないさ」
「え？　どういう意味ですか？」
俺が首を傾げると、カイルさんは周囲を確認してから口を開く。
「そのへんを含めて詳しく話そう。場所を移してもいいかい？」
俺とサラさんはカイルさんの言葉に頷き、カイルさんと共に学会の会場を後にした。

それから、俺たちはカイルさんの行きつけだという食事処に移動した。



カイルさんの話によると、政治家や一部の起業家たちが使うお店らしい。
どうやら、また場違いな所に入ってしまったようだ。
次々に高級な料理が運ばれてくるが、俺とサラさんはその料理に手を付けることができずにいた。
当然だ。自分の首が切られるかもしれないという状況で、食事が喉を通るはずがない。
まぁ、ケルはお構いなしで、自分の皿に盛られた食事を堪能しているみたいだけど。
すると、カイルさんは食事の手を止めて話し始めた。
「急に悪いね。いくつか質問に答えて欲しいんだ。ガリア様の研究について教えて欲しい」
「ガリア様の研究って……俺、詳しいことは分からないですよ」
「それでもだ。分かる範囲でいいから答えてくれ。君はあの研究のおかしなところに気づいたんだろう？　それを教えて欲しいんだ」
カイルさんはそう言って、真剣に俺に頼み込んできた。
正直、俺には学術的な部分は分からない。
それでも実際の経験から得た知見をもとに、カイルさんからの質問に答えた。
カイルさんは一通り質問を終えると、深くため息を吐いて眉尻を下げた。
「なるほど。原理としてはそういうことなのか。これまでガリア様が発表した研究内容自体が捏造ということか。あれだけの研究費用を何に使ったのか……まぁ、大体想像はつく」
カイルさんはそう言い、グラスに注がれた飲み物をくいっと飲んだ。

俺は先ほどからずっと気になっていたことを口に出す。
「あの、本当に俺たち、斬首刑にならないですかね？」
すると、カイルさんはもちろん、と口を開く。
「ああ、その点は気にすることはない。君たちを打ち首になんかさせないよ。むしろ、首を切られるのはガリア様の方だろう」
「え？　ガリア、様がですか？」
俺は思いもしなかった言葉に目を見開く。
一体、どういう意味だろうか？　俺とサラさんが顔を見合わせた。
すると、カイルさんが腕を組んで口を開く。
「ガリア様の発表が終わってすぐ、隣国に声を掛けられてね。共同研究として出資した資金の使い途を調査してくれと強く言われた」
「あー、なるほど。会場もざわついてましたもんね」
俺がガリアの研究の矛盾点を突くと、聴講者たちがガリアの発表を一気に怪しみ始めた。
もしかしたら、誰も突かなかっただけで、ガリアの捏造を疑っていた人たちが結構いたのかもしれない。カイルさんは何かを企むような笑みを浮かべた。
「面倒なことになった。しかし、これでガリア様を引きずり下ろす算段がついた」
「引きずり下ろす？」



「ああ。ガリア様には横領の疑いがかけられている。ただ、今までは立場上強く疑いをかけることができなかったんだ。ガリア様の家柄はこの国でもトップに近い権力を持っているからね」
カイルさんは肩をすくめてそう言った後、真剣な表情で続ける。
「しかし、隣国からの申請とあらば看過できない。それに、研究費用で不正が出れば、国費の横領の件も調査が入るだろう」
それから、カイルさんは俺たちに深く頭を下げた。
「これも君たちのおかげだ。感謝するよ」
俺は頭を下げるカイルさんに、慌てて顔を上げてもらった。
「俺は大したことしてないですよ。ただ俺は疑いを晴らすために色々しただけですから」
「それでもだ。君たちがあの場でガリア様を論破してくれなかったらと思うと恐ろしいよ」
すると、食事を終えたケルがトコトコとカイルさんのもとに駆け寄った。
それから、ケルはけぷっと可愛らしいゲップをして、カイルさんを見上げた。
「あの愚か者はなぜソータに執着したのだ？」
カイルさんは近づいてきたケルをじっと見て固まった。それから、眉尻を下げて俺を見た。
「えっと、さっきから気になっていたんだが、この子犬はなぜ普通に喋っているのかな？」
「フフフッ、我を子犬と勘違いしているようだな」
俺がカイルさんの言葉に答えるよりも先に、ケルが不敵に笑い始めた。

そして、ケルは誇らしげに胸を反らして言い放つ。
「我は地獄の門番、ケルベロス！　ケルベロスの我が喋ることの何がおかしいというのだ？」
「ケルベロス!?　これは驚いた。なるほど……それなら、鬼や地獄の使者を倒したというのも納得だ」
正直、ケルベロスと言われてもカイルさんは信じないだろうと思っていた。まさか、こんなに素直に納得されるとは。ケルは上機嫌に続ける。
「フフフッ、良い反応だ。それで、我のさっきの質問の答えを知っているのか？」
「ああ、なんとなく想像はつく。この国で古代魔法の研究をしているのはガリア一派だけだ。以前、他の研究者が参入しようとしたら徹底的に潰された。おそらく、研究分野を独占することで得られる資金が大きいのだろう。その一環で、ソータ君たちも狙われたんだと思う」
俺たちはカイルさんの言葉を聞いて、一瞬言葉を失った。
サラさんが俺を見て頬を掻く。
「……なんか、凄いことに巻き込まれそうになっていたんだね」
「そうですね。別にそこまでしなくてもいい気がしますけど」
俺はあまりにも酷いガリアの考えに顔を引きつらせる。
それから、俺は壇上でガリアが囁いた言葉を思い出した。
『悪く思うな小僧。古代魔法で金を稼ぐのは俺一人で十分なんだよ』



なるほど、あの言葉はそういう意味だったのか。
でも、別に俺は古代魔法の研究をしているわけではないんだけどな。
それでも、俺が資金を横取りしようとしていると思ったのだろうか？
すると、カイルさんが思い出したように口を開く。
「それと、君たちがガリア様のお気に入りだったグスマン伯爵を捕まえたんだろ？　多分、その恨みもあると思う」
「え？　グスマン伯爵ですか？」
グスマン伯爵というのは、俺たちが騎士になるのに反対し、餓鬼を使って襲ってきた伯爵のことだ。グスマンは餓鬼を悪魔と信じ込んで、その力で王都を落とそうとした。
最終的に俺たちに返り討ちにされ、どこかに投獄されているはず。
それから、カイルさんはガリアとグスマン伯爵の関係について教えてくれた。どうやら、グスマン伯爵家と宰相のガリアの家は結託して、平民から金を不正に巻き上げていたらしい。
その片割れを俺たちが捕まえたから、思うように金の回収が進まずに恨まれてしまったようだ。
……逆恨み、この上ない。俺はため息混じりに呟く。
「なんだか王都に来て色んなことに巻き込まれてばかりですね」
「ソータ。少し早いけど王都観光は終わりにして、拠点のタウロに帰るのはどうかな？」
「そうですね」

俺はサラさんの言葉に頷く。
カイルさんは俺たちの会話を聞いて、申し訳なさそうに眉尻を下げた。
「ガリア様の件が落ち着くまでは、王都から離れていた方がいいかもしれない。ガリア様の件は私がなるべく早く片付けることを約束しよう」
すると、ケルが慌てて俺のもとに駆け寄ってきて、俺の方に前足を伸ばして言う。
「もう帰ってしまうのか？　楽しいのはこれからではないか、ソータよ」
ケルのために王都に残ってあげたくはあるが、ケルの言う「楽しい」はガリアで遊びたいという意味だろう。おそらく、可愛らしい意味ではない。
俺は少しだけ申し訳なく思い、眉尻を下げた。
「今回はもう諦めよう、ケル。宰相相手に下手なことしたら、今度は本当に首が飛んじゃうよ」
ケルのお願いを聞いてあげたい気持ちもあるが、今回は相手の権力が大きすぎる。
正直、カイルさんに会わなかったら、本当に首を切られていたかもしれない。
すると、ケルはため息を吐き、悲しそうに返事をする。
「それならば、せめてあのときにあの愚か者の首を取っておくべきだったか」
ケルはシュンとして、そんな恐ろしいことを口にするのだった。
うん、急いで王都から離れよう。
俺はケルの言葉を聞いて、強くそう思うのだった。

## 2　畜生と使えないはずの古代魔法

学会から一週間後。
多くの大臣たちが出席する閣議の場で、ガリアは声を荒らげていた。
「はぁああ！　なぜ斬首の許可が下りん！」
ガリアは閣議の場で学会での出来事を話し、ソータたちを斬首刑にすべきと言い放った。
しかし、閣議の参加者は皆、首を横に振り、ガリアの提案を軽く退(しりぞ)けた。
ガリアは顔を真っ赤にして、机を何度もバンバンと叩く。
「この俺を馬鹿にしたのだぞ！　身分の違いも分からん馬鹿に制裁を下すのは当然だ！　そのうち何か重大な事件を引き起こしかねんぞ！」
ガリアが血走った目を閣議の出席者に向けると、副宰相が大きくため息を吐いた。
「それはあなたでしょう、ガリアさん」
「あぁ？　なんのことだ、カイル」
「ガリアさん。人の首よりもあなたの首を気にした方がいい」

「俺の首だと？　どういうことだ？」
すると、副宰相のカイルは一枚の紙をガリアに見えるように広げた。
「隣国から共同研究費の調査をするようにと通達が来ました。主に、予算の使われ方について」
ソータのいる国では、隣国と魔法学の研究を共同で行っている。
ガリアはその予算の多くを自分の研究費に回していた。
それに伴い研究成果を挙げてはいたが、全てはガリアが捏造したものだった。
古代魔法を使える者がいなかったことと、宰相の行う研究ということもあり、今までは厳しく追及されなかった。しかし、学会でのやり取りが原因で、隣国も突っ込まざるを得えなくなったのだった。ガリアはギロッと鋭い眼光でカイルを睨みつける。
「貴様っ、この俺が研究費を不正利用していると言いたいのか？」
「それを確認するための調査ですよ。成果を問うものではなく、ただ研究費の不正がないか確認するだけです。不正が認められた場合、他の予算の使い方についても色々と調べさせてもらうことになるでしょう。例えば……国費の一部についても」
カイルが意味深な視線を送ると、ガリアは激昂（げきこう）してカイルに詰め寄り、胸ぐらを掴んだ。
「貴様っ！　下級貴族出身の身で、俺をどこまで疑えば気が済むんだ！」
しかし、カイルはそんなガリアから目を逸らさず続けた。
「とにかく、今回は隅々まで調べることになります。拒否権はありません」



ガリアは怒りで肩をプルプルと震わせてから、カイルの胸ぐらを掴んだ手を払った。
「勝手にしろ！」
それから、ガリアは近くにあった椅子を蹴飛ばして、閣議の場を後にした。
ガリアが顔を真っ赤にして閣議の場から出てきたのを見て、秘書のエリックは慌てて後を追いかける。
「ガリア様。どうされたのですか？」
「うるさい！　早く帰りの馬車の手配をしろ！」
ガリアはエリックを突き飛ばし、そのままズカズカと歩いていった。
ガリアの怒りは屋敷に戻っても収まることはなく、三日三晩部屋の物や人に当たり続けた。ガリアは歯が砕けそうなほど強く歯ぎしりをして、大声で叫ぶ。
「あいつのせいだ！　あのクソガキどもさえいなければぁぁ！」
ガリアはこれまでの悪事を反省することなく、ただソータたちを強く憎み続けた。
常軌を逸する憎悪と怒りで部屋の椅子を何度も蹴飛ばす。
「魔導書を持っているのがそんなに偉いか！　古代魔法が偉いのか！　ああぁ⁉　殺してやる、あいつさえいなければぁ‼」
ガリアは頭をバリバリと掻いて、声にならない声で叫んだ。
そして、ガリアは数時間丸まったまま呻（うめ）いた後、フラッと立ち上がった。

ガリアからは黒いオーラのようなものが溢れ出ていた。
常軌を逸するほどの嫉妬と妬みと怒り。
ガリアの心は、そんな感情に支配されていた。
その結果――ガリアの心は修羅に落ちていった。
人間道とは別に、修羅道という世界がある。修羅道にいる「修羅」は嫉妬と怒りに囚われた存在だ。その修羅と同じような感情から逃れることができなくなった状態を「修羅に落ちる」と言う。
普通の人間なら心が修羅に落ちることはない。
しかし、ガリアが異常に憎悪の念に取り憑かれていることと、とある者の介入によってガリアの心は徐々に修羅に落ちていった。
ガリアは頭を抱えてぼそぼそと呟く。
「あいつに使えて、俺に使えないはずがない……復讐してやる。あのクソガキと、俺を疑うこの国の馬鹿共にも……」
ガリアはそのままフラッと屋敷を出た。
それから、ガリアは王都図書館に侵入し、一冊の古代魔法の魔導書を盗み出した。
ガリアは盗み出すなり、そのまま王都から少し離れた隠し別荘に向かった。
真っ黒な古代魔法の魔導書を片手に、別荘の庭に大きな魔法陣を描きだす。
「はぁ、はぁ、あのガキにできて俺にできないはずがない！」



それから、ガリアは地面に描いた五芒星の形に添って、大量の魔石をぶちまけた。
ガリアは研究費用を大量の魔石に変え、税金逃れをしていた。
魔石は研究で使用したと嘘を述べ、その魔石を売り払うことで税金のかからないお金を得ていたのだ。本来であれば私腹を肥やすための魔石だが、今はそれよりもソータたちを抹殺したいという欲求の方が勝っていた。
ガリアは魔導書の破れて読めない箇所をめちゃくちゃな理論で穴埋めし、強引に魔法を展開させた。ガリアは大声で叫び、五芒星をダンッと力強く叩く。
「あのガキどもを殺す力を俺に授けろ！」
本来、ガリアの古代魔法が展開されるはずはなかった。
しかし、ガリアが魔法を唱えると、魔法陣のすぐ下の地面にひびが入った。
そして、そこからヌッとこの世のモノではない何かが姿を見せた。
ガリアはその姿を見て、腰を抜かした。
「こ、こいつが悪魔なのか。俺が、俺が呼び出したのか。お、俺が……フハハハハハ！」
ガリアは壊れたように笑いだすと、なんとか立ち上がってこの世のモノではない何かに命令を下す。
「あのクソガキどもを殺してこい！　今すぐだ！」
ガリアは勝ち誇ったような笑みを浮かべ、ソータたちが殺されるのを待った。

◆

学会から一週間後。俺――ソータたちはカイルさんと話した後、王都を離れ、王都とタウロの中間の街、オルタナに来ていた。

俺はその街の食事処で一服してから、ぐっと背伸びをする。

「ようやくゆっくりできそうですね」

「そうだね。さすがにここまで来れば安心だね」

サラさんは笑ってそう言った。

本当ならもっとゆっくりしたかったが、いつまた首を狙われるか分からないという状況では気が休まらない。王都から結構離れたし、もうガリアと接触することはないだろう。

俺は辺りを見渡して首を傾げる。

「なんだか、あまり活気がないですね」

本来、オルタナはタウロよりも王都に近いので栄えている。

だが、お昼時だというのに、食事処にはそこまで活気がない。

すると、近くでテーブルを拭いていた女性店員がパッと俺たちを見た。

「そうなんだよ。ドレイクが近くに出て、この街に立ち寄る人が減ってんだよ。困ったもんだよ」



「ドレイクか。なるほど、その影響か」

サラさんは納得したように小さく呟いた。

ドレイクというのは、翼のないドラゴンのような魔物だ。

大きさはドラゴンより二回りほど小さく、討伐の難易度はワイバーンよりも易しい。

なので、ある程度ランクの高い冒険者パーティなら討伐は難しくないはずだ。

「この街の冒険者は討伐に行かないんですか？」

女性店員は呆れ顔で手を横にぶんぶんと振った。

「この街の冒険者じゃ無理だね。腕利きの冒険者が少ないんだよ。唯一倒せる希望のあったパーティが返り討ちに遭ったしね」

「じゃあ、ドレイクが放置されてるってことですか？　それは危険ですね」

女性店員はため息を吐いて、窓の外を見る。

「せめて、もう少し王都に近ければ、王都から腕利きの冒険者が派遣されたかもしれないけどね。ここは色々と中途半端な街だからねぇ」

女性店員の話によると、オルタナは王都の管轄外らしい。

そして、オルタナで力をつけた冒険者は、次々に金払いの良い王都に行ってしまうため、常に腕利きの冒険者が定着しないとのことだった。

つまり、現在ドレイクを討伐できるパーティは俺たち以外いないということになる。

俺がサラさんとケルに目配せをすると、二人ともすぐに頷いてくれた。
「それなら、俺たちがそのドレイクを倒してきます」
「お客さんらがかい？　いやいや、相手はあのドレイクだよ？」
女性店員は俺たちが冗談を言ったと思ったのか、口を押さえて笑う。
まぁ、普通は子供と女性の二人だけでドレイクを倒しに行くなんて考えられないだろう。
「大丈夫です、任せてください。こう見えても俺たちそれなりに強いんです」
すると、ケルがすぐ近くに駆け寄ってきて、俺を見上げた。
「愚か者で遊べなかった分、ドレイクを遊び相手にしてやろう。ドレイクだと少し物足りないが、そこは我慢するとしようではないか」
ケルは嬉しそうに言って、食事処の出口に向かって駆けていった。
サラさんはそんなケルの後ろ姿を見て、顔を少し引きつらせる。
「ケルにとっては、ドレイクは遊び相手なんだね」
「本当、心強いことこの上ないですよ」
俺は子犬にしか見えないケルの後ろ姿を見つめ、そんな言葉を漏らした。

冒険者ギルドから情報を得た俺たちは、ドレイクがいると言われているオルタナの街はずれにある岩山に向かって出発した。



道中、何度か魔物と戦闘をしたが、特に苦戦するようなことはなかった。
支援魔法をかけているということもあり、順調に岩山を登ることができた。
その途中でサラさんが何かに気づいたように呟いた。
「おかしい。もうドレイクの縄張りに入っているはずなのに、出てくる気配がないな」
「もしかして、他のパーティと戦ったときに怪我をして動けないとかですかね？　でも、それならもっと狂暴になっていそうですけど」
確かにサラさんが言うように、もうすぐ頂上なのに、ドレイクは姿を全く見せない。
それどころか、咆哮（ほうこう）の一つも聞こえてこないのは不自然だ。
『魔力探知』に大きな反応があったので、ドレイクの魔力だと思っていたけど違うのか？
俺が色々考えていると、ケルが小さく「ほう」と声を漏らした。
視線を向けると、ケルは意味ありげな笑みを浮かべていた。
「ケル、何か気づいたの？」
「血肉の匂いがする。『魔力探知』に反応している魔力は、ドレイクではないかもしれん」
俺はケルの言葉を聞いて立ち止まる。
「ドレイクを倒した魔物がいるってこと？」
サラさんはハッとして眉根を寄せる。
「もしかして、餓鬼の生き残りかい？　グスマン伯爵が呼んだ個体が他にいたのかもしれない」

普通ドレイクを倒す魔物が出たとなれば、もっと騒ぎになると思う。
オルタナの食事処の女性店員が知らなかったことから考えると、こそこそと動いている地獄関連の者の可能性が高い。しかし、ケルは首を横に振った。
「餓鬼とは違う。強い獣臭がする」
「獣臭……っていうことは、魔物なの？」
「いいや、魔物よりもずっと獣に近い」
ケルは何か確信を持ったのか、飛び出すように駆けた。
俺とサラさんが慌ててケルの後を追うと、少し先に行ったところでケルが足を止めていた。
ケルが岩山から頭を出し、じっと一点を見つめていたので、俺たちもケルと同じようにした。
すると、そこには体のあちこちを食いちぎられたドレイクの死体が転がっていた。
肉片や大きな骨が飛び散っており、そのすぐ傍にはドレイクの死骸を食べる獣の姿があった。
ドレイクと同じくらいの巨体の牛のような獣。鬼のような頭がついており、ギョロっとした目が特徴的だ。とてもこの世のモノとは思えない。
俺は見たことのない獣を前に、一瞬言葉を失った。
「……なんですか、あれ」
「魔物、ではないよね」
ケルはサラさんの言葉に頷いた。



立ち読みサンプル
はここまで

「ふむ、あれは魔物ではない。あれは畜生だ」
「畜生？」
俺は初めて聞く言葉に首を傾げる。ケルは畜生と呼んだ獣を見たまま、説明を続ける。
「本来人間道にはいない生き物だ。一体、どんな愚か者がこいつを呼び寄せたのだろうなぁ」
「っていうことは、また餓鬼を呼んだグスマンみたいなのがいるってこと？」
「ふむ、そうなる」
ケルは嬉しそうに尻尾をぶんぶんと振った。
どうやら、新しい愚か者を見つけて喜んでいるみたいだ。
すると、突然畜生が俺たちの方を振り向いた。
「ギャギャギャッ！」
そして、畜生は食べこぼしを振りまきながら、俺たちに突っ込んできた。
正気を失っているのか、目の焦点がまるで合っていない。
俺たちは突然の行動に身構える。
一方、ケルは鼻で笑って畜生に向かって駆け出した。
「畜生が我に向かってくるか。どれ、少し遊んでくれよう」
そして、ケルはそのままの勢いで畜生の頭に頭突きをかました。
ごちんっ！